

“ひかりのさとの会”の研究

名古屋市立大学人文社会学部
愛光園

滝村雅人
小松祐子

はじめに

「ひかりのさとの会」は、知的障害者通所更生施設「愛光園」の実践を母体として、やがて、成人の入所型施設が必要視されたことを受けて設立された法人愛光園の後援会組織である。最初は、「愛光園」利用者の保護者が中心となって設立されたのであるが、その後、会の活動のなかで設置された「ひかりのさと・のぞみの家」（身体障害者療護施設）および「まどか」（知的障害者入所更生施設）の利用者の保護者が中心となり、今日に至っている。

この「ひかりのさとの会」が掲げる理念は、法人愛光園全体の理念であり、それは法人が抱える全ての施設の基本的実践理念として位置づけられるものであるといえる。

「愛光園」の実践研究については、その研究目的と内容・方法についてすでに報告しているが⁽¹⁾、再度その目的を確認しておきたい。

「愛光園」は、2004年で設立後39年を迎える施設であり、愛知県下で初めての重度・重症障害者の通所型施設として発展してきたものである。この歴史は、わが国の障害者福祉政策の歴史でもあり、ひいては愛知県における障害者福祉対策充実の歴史でもあった。その実践レベルの高さは高く評価されており、それは創設者であり初代施設長の皿井寿子のみならず前施設長の廣瀬治代をはじめとした、愛光園職員全員の絶え間のない努力と献身的な労働、そして多くの賛同者によって支えられてきたのである。

本研究は、歴史的に愛知県の障害者福祉対策の進展に大きな役割を果たしてきた「愛光園」が新たな出発の時を迎えるにあたって⁽²⁾、これまで「愛光園」が果たしてきた社会的役割を明らかにするとともに、その実践の理論的裏付けを行うことを通して、これまでの運動や実践を検証し、その問題点と今後のあり方を探ることを目的としている⁽³⁾。

そこで研究の展開としては以下のような柱を考えている。

まず第一に、社会福祉法人愛光園全体の基本的な設置及び実践理念を明らかにする。

第二に、それに基づき、「愛光園」を中心に、社会福祉法人愛光園と各施設の設立の契機及び経緯について、歴史的に明らかにする。

第三に、「愛光園」のもつ独自性に着目しつつ、その運動・実践内容を整理し、設立理念との整合性を検証する。具体的には、個々人に対する個々の実践の検証である。それは、実践の歴史的な変遷も含めて今日の実践が、「愛光園」の理念のどの部分の具現化なのか、あるいは、個々人に設定された到達目標とそれに向けての実践内容の検討である。

そして第四には、後援会組織としての「ひかりのさとの会」のあり方の検証である。「愛光園」は、その設立には保護者を含む多くの人々の協力があつた。それが団体としての機能を持つ基盤であつたといえるが、この設立の経緯が組織の性格を規定することから、「ひかりのさとの会」が、真の意味で運動体としての機能を有してきたのか、あるいは相互扶助的な機能であつたのか、そして今後どのような役割を担うべきなのかを明らかにしていくものである。

拙論は、この第四番目の研究課題に迫るものであり、「愛光園」の実践に関わつた多くの人の存在にも目を向け、それらの人々の協力によって展開してきたことと関連させながら、「ひかりのさとの会」の活動内容を検討していくものである。

その意味で、末尾の年表には、「愛光園」年表⁽⁴⁾を一部修正するとともに、「ひかりのさとの会」およびそれらの活動に関わつてきた人々の協力の様子も含めて掲載している。このように、周囲の賛同者の存在に着目する理由は、福祉施設の設置やその実践には、必ず多くの人々の協力があるはずであるが、施設研究の中では、こうした周囲の人々との関係にまで目を向けて分析を行うことが少ないこと、そして、とくに「愛光園」の実践には、後援会組織をはじめ多くの賛同者の存在が無視できないほど大きな役割を果たしてきているからである。

この年表は、小松祐子が中心となり作成したものであり、以下の資料を参考にしている。

- ・「愛光園だより」創刊号～
- ・皿井寿子『光をみつめて』風媒社1986. 7
- ・「ひかりのさと」創刊号～
- ・ひかりのさとの会『ひかりのさと－ひかりのさとの会10周年記念誌』1984. 5
- ・ひかりのさとの会『ひかりのさと－ひかりのさとの会20周年記念誌』1994. 5
- ・ひかりのさとの会『ひかりのさと－ひかりのさとの会30周年記念誌』（2004. 1 現在の原稿を借用）。

1. 「ひかりのさとの会」のこれまでの変遷

① 「ひかりのさとの会」の変遷

「ひかりのさとの会」は、2004年で30周年を迎える組織である。この会のこれまでの変遷をみると、大きく3つに時期区分ができる。

まず第一期は、1974年に「ひかりのさとの会」が発足してから、1985年頃までの時期である。この時期は、愛光園の利用者が成人になってから後のことを考え、成人「施設」の設置を目指して集まった人によって「ひかりのさとの会」が設立され、その後、施設の建設に向けての活動を展開していく時期である。掲載している年表にもあるように、「ひかりのさとの会」が発足した翌年、1975年には重度身体障害者の施設として「ともしびの家」を設置し、1976年には男女の独身寮を設置する。そして、1978年に重度身体障害者療護施設「のぞみの家」を建設し、1981年に職員宿舎を建て、1985年には知的障害者更生施設「まどか」を建設するのである。こうして現在の

法人愛光園が所有する障害者施設が整備されることになる。

こうした施設設置の活動のなかで、「ひかりのさとの会」には、広報、農業、施設研究委員会が置かれ、それぞれの役割において各委員会メンバーが中心となって、各施設への支援活動を行ってきたのである。また少し遅れて、1978年になると、ボランティア・行事委員会も発足し、ボランティア活動の組織化や支援を始めるのである。さらに1985年には共同購入委員会が発足し、食料品を中心とした物品の共同購入活動を手がけていくのである。

以上の状況から、1985年頃までの「ひかりのさとの会」は、成人施設の設置に向けて多くの活動を展開してきたのであり、その活動の中心は、前半では重度身体障害者の施設づくりであり、後半は重度知的障害者の入所施設の設置にあったといえる。すなわち、この時期は、施設づくりという目標に向かって、多くの人の賛同と協力を得ながら活動を行ってきたのである。もちろんそこでは、会員集めと、施設建設のための資金集めが大きな課題となっていた。

さて、「ひかりのさとの会」の第二期は、1986年頃から1991年頃の時期である。この時期は、養護学校卒業後の問題がクローズアップされ、愛光園も成人施設へ転換する時期である。また、「ひかりのさとの会」では、成人施設の問題に関連してグループホームなどの設置をめざす方向での展開がいわれている。すなわち、この時期は、「ひかりのさとの会」としては、それまで設置してきた施設への支援を行いつつ、地域生活支援への準備期に当たるといえる。具体的に作業所やグループホームが開所されるのは、この後の第三期に当たるが、この第二期は、そのための準備期と位置付けることができる。

そして第三期が、概ね1992年頃から現在に至る時期である。この時期には、1992年の「ひかりのさとファーム」（心身障害者小規模授産施設）の開所、グループホームの「戸田ホーム」の開所等にみられるように、「愛光園」「のぞみの家」「まどか」等の各施設に関連した地域生活支援事業が行われ、作業所やグループホームがそれぞれ独自の実践を展開し、利用者の活動の拠点作りへと発展していく時期である。しかし、一方で、「ひかりのさとの会」としては、それまでの施設設置に向けての活発な活動は成りを潜め、相対的に活動の低迷を招いてきた時期でもあるといえる。

この時期における「ひかりのさとの会」の動きについての分析は別の機会に譲るが、今日2003年度からスタートした法人愛光園の内部構造の抜本的改革計画になかでも、この後援会組織としての「ひかりのさとの会」に関しては手つかずになっているのが現実である。その意味でも、また法人愛光園全体の改革によって、さらに新たな方向性が見えてくるものと考えられるが、そうした昨今の動向をも、それまでの法人愛光園の各種施設の単独での事業の実施の結果であり、当初求められた基本理念の実践が、混迷してきていることの証左であるといえる。したがって、今後の新たな方向を模索する昨今であるがゆえに、それまでの経緯を整理し、その時々担ってきた役割と存在意味を明確にすることが重要であるといえる。

② 協力者の存在

「ひかりのさとのかい」には、つねに多くの賛同者の協力がある。それらは、愛光園設立の当初から、団体であったり個人であったりと、その形態は様々であり、協力の内容も種類の活動がある。「ひかりのさとのかい」が発足するまでの支援としては、資金の寄付行為や建築会社等による建物の建築やその修繕等といった協力、および物品の寄贈に関する協力が多いたが特徴である。

そして「ひかりのさとのかい」が発足してからは、もちろんこうした個人や団体の寄付等による協力が引き続き行われていくことは同様であるが、一方、特定のボランティア団体による、定期的な援助活動が展開されてくるのが大きな特徴といえる。

この中で、「ひかりのさとのかい」の中に組織されたボランティア委員会が「のぞみの家」を中心とした施設へのボランティアの受入に対応しており、必要に応じてボランティアスクールやワークキャンプも開催している。このボランティア委員会の考え方について、「ボランティアをする事はかわいそうだからしてあげるのではなく、助けあう事だと思います。助けあってそれぞれの人が个性的に自己実現していく社会がひかりのさとであり、その輪を広げていくのがひかりのさとのかいの運動であり、ボランティア委員会の運動であ」⁽⁵⁾ると述べられている。施設の利用者とボランティアの相互の助け合い活動としてボランティアを位置付けているといえる。ボランティア委員会が設置されてからの6年間のこの委員会の活動をまとめたものが表1である。

また年表からもある特定の団体が継続的に協力していることがうかがえる。たとえば、少林寺拳法名東支部、立正校正会、一休さんグループ、五十三会などの団体は、各種行事の実行に多く関わっていた団体である。一方、三菱重工労働組合、日産自動車労連、自動車労連等の団体も一定期間定期的に関わってきている。これらの団体の協力というのは、先の各種グループや個人の支援に比較して、物品や建物の寄贈などによる関わりが中心をなしているという特徴がある。このような労働組合などによる協力は、1985年頃までにその多が見られるが、1980年代後半からは、こうした団体からの支援は減少し、「ひかりのさとのかい」そのものの活動の焦点が、助成金の申請に向けられていくという経過的特徴がある。こうした状況については、また別に機会に詳細に整理・分析していくことにする。

2. 設立の契機と基本の願いー1985年頃までの活動を考える

1974年に「ひかりのさとのかい」ができるまでの状況は、皿井が始めた「愛光園」で重度障害児に対する実践を行っていたのみであった。「愛光園」での実践を支えたのは、年表にもあるように、多くの人々や団体の協力であった。それは資金の寄付であったり、具体的な備品の寄付や提供であったり、あるいは建物の建設に関わる協力であったりと、小学生から大人までの広い範囲の協力を取り付けていたのである。そのような協力によって、「愛光園」での皿井の実践が展開され、1972年には肢体不自由児施設としての認可も受け、翌1973年には法人愛光園の設立認可を受けたことで、その後の実践の広がり契機となるのである。

しかし一方で、「愛光園」が福祉施設としての形態を作り上げることで、利用者の将来の成人

表1 ボランティア委員会の活動内容

年度	企画内容	企画反省
53	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティア希望者の受け入れ ○ ボランティアとの交流（立正佼成会） 	<p>実際的な活動は、当初の思いほど燃焼できなかった。</p>
54	<ul style="list-style-type: none"> ○ ボランティアの受け入れ ○ 一休さんグループが参加する ○ 交流（夏まつり、立正佼成会） 	<p>名古屋から勤労青年の一休さんグループが参加し、のぞみの家に新風をふきこむ。受身的な役割にとどまることなく外へ働きかける基礎づくりの時。</p>
55	<ul style="list-style-type: none"> ○ 第2回ワークキャンプの企画 ○ 交流（立正佼成会） 	<p>のぞみの家ができてはじめてワークキャンプのとりくみ。ひかりのさととの会の行事と住人さんの参加の方法で戸惑う。</p>
56	<ul style="list-style-type: none"> ○ ワークキャンプ ○ ボランティア・セミナー ○ ボランティア座談会 ○ 交流（大乘教刈谷青年部、立正佼成会、東知多農協青年部） ○ 名簿づくり 	<p>ひかりのさととの会のボランティア委員会だが、その主な力は、のぞみの家の交流会に注がれ、ひかりのさと全体が動き出す活力までいたらなかった。これからひかりのさととの潤滑油の動きをするにはどうしたらよいか。いろいろな場のニーズの把握をする必要がある。</p>
57	<ul style="list-style-type: none"> ○ ワークキャンプ ○ 支部づくり（一般会員の人達の結びつき） ○ 東浦町との結びつき ○ 名簿づくり ○ 各委員会との連携 ○ ボランティア座談会 	<p>東浦町の社協と協力しあって、ボランティア講座を行う。はじめて地域へ出ての企画。やはり直接地域の人と出会うことは勉強にもなり委員一人一人の自信ともなる。</p> <p>同じようにひかりのさととのボランティアともひざをまじえて話す。ボランティアの目を通したいろいろの助言をいただく。</p>
58	<ul style="list-style-type: none"> ○ ワークキャンプ ○ ボランティア講座 ○ 東浦町の老人の方とのかかわり ○ のぞみの家のボランティアのかかわり ○ 会員の地域グループ化 ○ 年間計画・ボランティア通信の発行 	<p>前年度の2月に、東浦町の老人の方に、趣味を生かすことで、わらぞうりの作り方をおしえていただき、それを通してはじめてのふれ合いがもたれる。老人の方とのふれ合いは今後の大きな課題。会員の人達にもできることでよいから参加方法はないかということで地域グループ化は暗中模索の段階。</p>

後の生活・活動の場の問題が顕在化することになる。

「ひかりのさとの会」の設立者の皿井は、当時のことを、「成人した者が、親を離れて一人り立ちしていくように、障害者でも自分達の生き方を考え、生き甲斐を見出せる処で、くらしたいと願っています。単なる收容隔離の施設でなく、親も兄弟も地域社会の人々も共に交わりつつ、助けあいながら生きていける、自給自足のできる施設でない施設がほしい」という思いから、場所をさがしていた、と回想している⁽⁶⁾。

そしてその時の協力者が日高昇であった。東浦町の6万坪におよぶ農場を無償で提供してくれたことによって、皿井の夢の実現に向けて動き出すのであり、「ひかりのさとの会」は、こうして施設設置に向けての活動を展開するための組織として誕生するのである。

皿井は、この「ひかりのさとの会」設立への思いをひとつの理想図として、そして堅持していきたい願いを「基本の願い」として表したのである。それが、その後の「愛光園」をはじめとして、法人愛光園がもつ実践理念として、表現の仕方は多少変わってきているものの、内容的にはそのまま今日まで引き続き維持されてきたものである。

皿井が、当初、集まってくれた人々に示した「基本の願い」は以下のような文章であった⁽⁷⁾。

- 「1. 障害があろうとなかろうと、人間として生きることの尊さをみつめ、お互いに助けあい、許しあいつつ、共に生きていこうとする人々に集まっていただきたい。
1. どんな重い障害があっても、その人にふさわしい住居や設備、働き、生き方を考え、自己実現できる状態にしたい。
 1. 自給自足を基本的な生き方として、手づくりの心を忘れずに、ぜいたくをせず、無駄使いをつつしみ、物を生かす生活にしたい。
 1. 各人の信仰、思想は尊重し、個人の生活も大切にしたいが、ひかりのさとの住人としては、すべて白紙の状態、理想にむかって共に歩んでいきたい。
 1. ひかりのさが単なる閉鎖的な小社会になってしまうのではなく、地域社会とのつながりを持ち、人間社会の一つの理想として輪を広げていくことのできる中核としたい。
 1. 理想をめざして、お互いの意見を語りあい、謙虚な気持ちをもって実行にうつしていきたい。
 1. 経営者と労働者、管理者と收容者という対立をなくし、共に生きる者として、同じ立場にたって考えあうあり方にしたい。」

そして、「障害者のための施設づくりというよりは、人間としての理想郷を夢みたことになり…(略)…自覚した人達が、共通のねがいのもとに一致して作りあげていくものでありたいと思います。」と結んでいる。

また、「ひかりのさと」という、名称についても皿井は、「誰も心が、ふとそこへもどりたいような、暖かい愛の光のふるさととなることができますように。又、『この子らを世の光に』とその理想の光をかかげられた、故近江学園園長、糸賀一雄先生のいわれたように、地域社

会の大きな運動の中核として働くことができますように。」という願いをこめて命名したものであると語っている⁽⁸⁾。

こうして生まれた「ひかりのさとのかい」は、今後のプランを策定しつつ、会の運営に関して1974年7月には、広報、農業、施設研究委員会を設置して具体的活動を行っていくのである。さしあたっては、三菱重工労組による募金を資金としてプレハブの「ともしびの家」を建設することにし、一方で、広大な土地の利用方法について検討を始めていく。同年10月例会において、農場活用の基本方針が決定されている。その基本方針は、「一、自給自足を第一目的とし、余力があれば利益をあげることを考える。一、農薬や科学肥料は用いず、自然農法を採用する。一、当面使用可能な4千坪の土地（将来施設建設予定地）は畑として使用することとし、まず堆肥作り（刈草と牛糞を混合して作る）からとりかかりたい。」とされている⁽⁹⁾。そして皿井は、この時「食料は人間が生きる基本として、ひかりのさと住人及び会員は、ひとりひとりが土にふれあい、土を生かすことを通じて農業に参加することにしたい」と述べ、農業に対する基本的姿勢を表明している。食料が人間が生きる基本であるという視点は、これも先の「基本の願い」と同様に、糸賀一雄思想の一環である。

また、この時、廣瀬は、「ひかりのさと療護施設への夢」と題した文章のなかで、今後取り組んでいくべき療護施設設置に向けての基本的な姿勢について述べている。そこでは、『ひかりのさと』がめざしている施設は、基本的には重度も軽度もなく、その人にとってふさわしく、のびのびと自己実現のできる場であり、その人にふさわしい住居・設備の考えられた場でありたい」とし、その最期に「あくまでも主体は私たち。法律の言いなりになるのではありません。法律では人間の生活が守れない点がどんどん出て来たら、これをとおして、法律を変えるところまで発展し、第二、第三、第四・・・のひかりのさとが出来あがるよう努力したい⁽¹⁰⁾」としている。すなわち、あくまでも施設の利用者が主体となり、各人がそれぞれに合わせた形で自己実現が図れるような施設を設置し、それによって、法律をも変えるものとして発展させていこうとする意志の表明であったといえる。

このような「ひかりのさと」の理念を施設建設に盛り込むためには、単に施設を作るという発想ではなく、本当にその理念を具現化できるような施設を設計、建築しなければならない。そのためには、設計の段階から、「ひかりのさとのかい」の理念を理解し、利用者やその保護者、職員等のそれを使って生活を営んでいく人々の実態を理解しておく必要があるのである。この療護施設建設に携わってくれた設計士が、「ひかりのさと」の考え方に共鳴し、一緒に既存の施設の見学に行ったりと、積極的に取り組んでくれる設計士に巡り会ったことが、「ひかりのさと」の理念を具現化できる施設の建設を可能としたといえる。

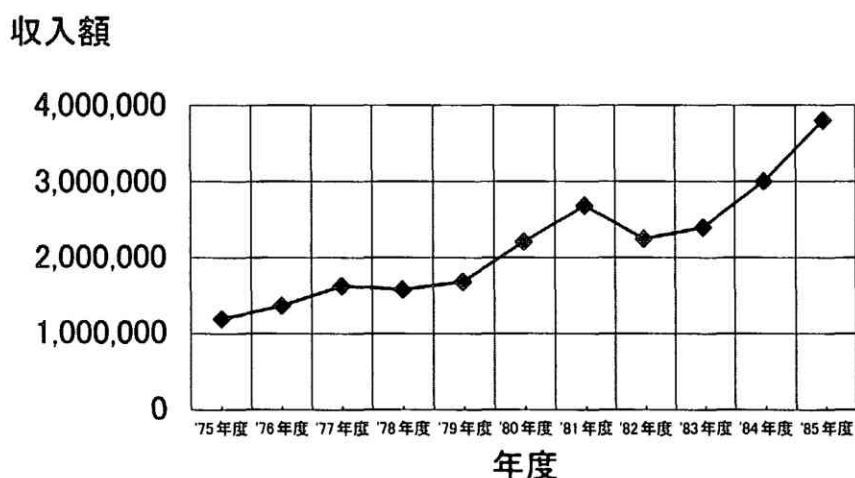
1976年6月例会における設計士の説明にその考え方と取り組む姿勢がうかがえる。そこでは、設計上の留意点について、『管理しやすい為の施設ではなく、ホームの雰囲気が出るように考えた』と4つのグルーピングを説明。『収容される』という考えでなく、『自分たちの家』という考

えです。…(略)…『施設ではなく、家を創る、という考えに立つと、建築学的なプランだけではできず、みんなの考えを寄せ集めて創っていかねば出来あがらない。設計者としてでなく、仲間の一員として参加したい』⁽¹¹⁾と語っている。

このような、自らもその一員であるという視点が、「生活の場」としての施設のあり方を追求し、他人ごとではなく自分のこととして、また皿井や廣瀬が述べている「ひかりのさと」の理念に共鳴し、それを具現化するべく施設の設計を可能としたのである。このような人に巡り会えたことは、「ひかりのさとの会」にとって幸運であったといえるが、それは、決して偶然のことではなく、それまでの「愛光園」の実践とそこに関わってきた多くの人々の協力の延長線上でのことであったといえる。人とのつながりがいかに重要であるかを物語る出来事であったといえる。廣瀬は、この点について、『ひかりのさと』の計画は、法律一本槍で考えていたならば決してできないし、もうけ第一に考えたら、不安でこれも又できないことと思います。そのようなものを越えた人間同志のぶつかりあい、心のぶつかりあいの中から生まれてくるものが、真物であるのではないか。それは人と人との出会いでしかないとも言える」とし、「療護施設の具体的な仕事の第一歩が、このような素晴らしい人との出会いであったということは、何物にも優ることと感謝したいと思うのです」⁽¹²⁾と述べている。

このような療護施設建設に向けて動き出すとともに、1976年6月にはプレハブの「まどか」が完成し、療護施設建設資金確保のために自転車振興会等の各種補助金申請を行っていく。また、資金獲得の意味も込めてバザーを行う。これ以降バザーは「ひかりのさとの会」の行事として毎年行われるのであるが、図1は、第一回目のバザーから1985年度のバザーまでの収益金の推移を表したものである。多少の上下はあるものの順調にその売り上げを伸ばしていることがわかる。こうして得られた資金が「のぞみの家」や「まどか」の建設・運営資金として使われていくことになる。

図1 年度別にみたバザー収入の推移



このような努力の結果、1978年4月に「ひかりのさと・のぞみの家」が完成するのである。その間、時を同じくして重度知的障害者のための作業所の問題が「ひかりのさとの会」の例会で問題となってきている。

そして1980年には職員宿舎の建設が行われ、1983年には、知的障害者更生施設である「まどか」の建設に向けて動き出すのである。

このように、「ひかりのさとの会」は、療護施設、更生施設の建設や独身寮などの生活ホームづくりに向けて、バザーや、各種助成金申請などの活動を行い、建設資金や運営資金の確保に大きな役割を果たして行くのである。

しかし、この間、「ひかりのさとの会」自体が決して順調に発展してきたとは言い難いのも事実である。

図2 年度別にみた「ひかりのさとの会」会員数の推移

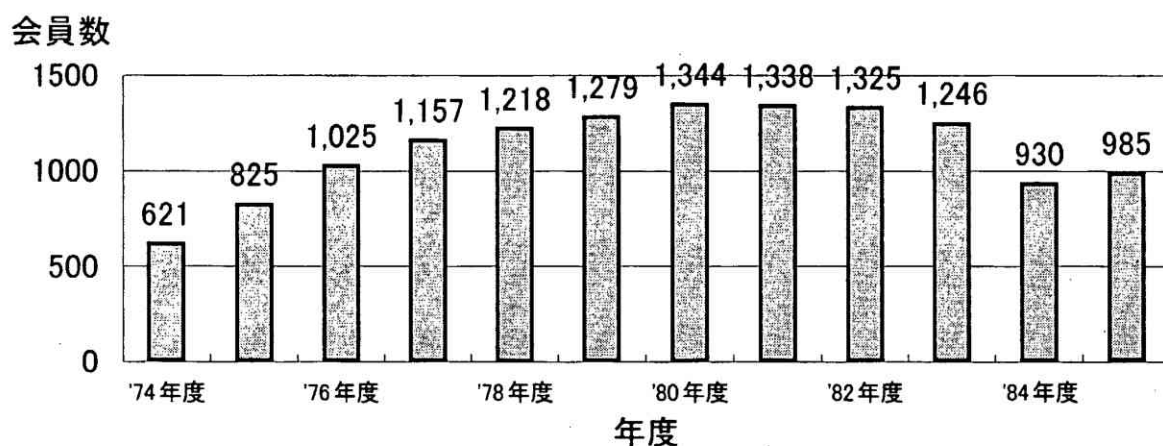


図2は、1974年の「ひかりのさとの会」発足時から1985年までの会員数の推移を表したものであるが、74年度から徐々に増加しつつも、1980年度を境に減少傾向にある。また毎回の役員会や例会においても「ひかりのさとの会」のあり方や会員数のことが話題となってきている。会員数が増加している1978年3月の例会では、「会の基本理念は、一人一人の人を大切にすること、である以上、例会の発言は大切にとりあげていかねばならないし、何でも話し合える雰囲気をつくっていかねばならないのではないか。又、会としてとりあげた問題へのとりくみ方も、有名無実であってはならない。…(略)…これからは、今まで以上に難しい問題が出て来ることが必至ですが、徹底的に話し合い、ひかりのさとの理念を追求していくべき努力を惜しまないようにしよう」と決意したことが述べられている⁽¹³⁾。また、会員数が減少し始めた1982年2月の役員会でも、「ひかりのさとの会」のあり方が話題となっている。そこでは、「行事との関係、ワークキャンプや、農業の問題など、どれ一つをとっても、会員の集まりが減少し、当初の会全体でぶつかった燃えるようなとりくみが稀薄になったのは何故か。のぞみの家の存在にばかり閉じこもりすぎているか、もっと広く手をつなぐ努力をしなければならないのではないか、等できあがったもの

を守り育てていくことの困難さと重要さは勿論、より広い会としての働き、かかわりを模索する段階に来たことを確認する。又農業の方としても、一部の者にオンブしっぱなしで、一人一人の問題になっていないことが指摘され、今年これらをどのように解決していくかが課題となる。」と記述されている。さらに1983年3月の役員会でも、83年度の基本方針として、敢えて「理念、基本の願いを大切にする」という一項が述べられている。同様に1984年4月の例会における本年度の基本方針の第一項に、「ひかりのさと基本の願いの強調と実行に努める」ことがいわれ⁽¹⁴⁾、1985年度の基本方針にも同様の項目が記載されている⁽¹⁵⁾。

このような、「ひかりのさとの会」の例会や役員会において、その理念を堅持していくことがことさら強調されていることは、先の会員の行事での集まりが減少してきて、「当初の会全体でぶつかった燃えるようなとりくみが稀薄になってきた」ことへの危惧の念が語られていることと連動しているといえる。会員への意識の高揚を年度の基本方針に上げなければならないということと自体、その理念の具現化が希薄化してきたことを表しているといえる。

おわりに

かつて糸賀一雄は、近江学園での実践を通して、「どんなに重い障害をもっていても、だれととりかえることのできない個性的な自己実現をしているものなのである。人間と生まれて、その人なりの人間となっていくのである。その自己実現こそが創造であり、生産である。…(略)…重症な障害をもったこの子達も立派な生産者であるということを認めあえる社会をつくろうということ」を主張し⁽¹⁶⁾、さらに「この子らを世の光に」という名言を残したことは有名である。そして近江学園での知的障害児の生活を考えるとき、日々の生活の柱となったのが「食事」であり、糸賀が重要視していた部分であることは周知のごとくである。

「愛光園」は、この糸賀思想をとその実践理念を継承し大切にしつつ実践を行ってきた。そしてそれはより大きな形で「ひかりのさとの会」として結実し、その結果によって、「ひかりのさと・のぞみの家」や「まぞか」をはじめとした、現在の社会福祉法人愛光園の基盤を形成してきたのである。

「ひかりのさとの会」のこれまでの流れは前述した通りであり、その変遷を表したのが末尾の年表である。今回は会の設立以降最も顕著な活動を行っていた1980年代半ばまでの状況について検討したものであるが、そこには、「ひかりのさとの会」に込められた創設者皿井やその継承者である廣瀬の実践理念と障害者とその家族を含んだ地域の人々との関わりにおける考え方を伺い知ることができる。糸賀理念を継承しようとする「ひかりのさとの会」において、前述したように、様々なところで、そこに込められた“思い”が表されている。

「農業を重視したこと」は、食事、すなわち「生きること」を重視したことに他ならない。また障害者の自己実現のできる場所としての「施設でない施設」をめざしたこと。そしてそこに「人間としての理想郷」を思い描いた発想は、かつて糸賀の継承者である田村一二が描いた「若

荷村」の発想と重なってくるものがある。そしてこうした実践の場を構築していくためには当然、多くの人々の理解と協力が不可欠であるが、「愛光園」設立時から様々な人々の協力があったことは年表からも明らかである。しかし、この点は今後の研究による検証を待たなければならないが、「ひかりのさとの会」が設立後さほど時間が経たない間に、会員数の減少であったり、会の活動の停滞減少が見られることは、多くの人々の関わりと協力があったとしても、それを継続させ、時には組織していくような活動が、「ひかりのさとの会」において十分機能していなかったことを物語っているのではないかと懸念されるのである。つまり、周囲の人々の協力が散発的になってしまったことが、その後の「ひかりのさとの会」の活動とその方向性のある部分規定してきたのではないかということである。

また、皿井は「地域をも変え得る力となることを目指した」とあるが、現在の法人愛光園の有り様からは、果たしてこの願いや目的は達成できたということができようか。この点についても、今後の研究によって明らかになることと考える。

1985年頃までの動向について、周囲の協力者のありようと共に、「ひかりのさとの会」の姿を追ってきたのであるが、現在の「ひかりのさとの会」の抱える課題と今後の目指すべき方向性、そして現在まで、様々な課題を抱えつつも十分にそれを解決できずにきた法人愛光園の有り様は、この時期の活動のあり方に規定されているのではないかと推測されるのである。さらに年代を追いつつ、「ひかりのさとの会」と法人愛光園の検討が必要といえる。現在、法人愛光園は新たな法人組織を目指して、新しい取り組みを始めている。こうした時期だからこそ、歴史的にその経緯を整理し、問題の顕在化がいつからどのような部分でおこってきたのかを明らかにしておくことが重要といえる。

註

- (1) 滝村雅人・小松祐子著「“愛光園”の理念と実践の研究」『名古屋市立大学人文社会学部研究紀要』第14号、2003年3月、57～76頁 参照。
- (2) 「愛光園」は、2003年度から「大府学園」（前大府市立知的障害児通園施設）の運営を引き受け、2006年度には現在の場所を離れて「大府学園」の敷地内へと移転の予定である。また、法人組織自体の抜本的改革を2003年度より始めており、法人組織の充実とシステムの統合化を行ってきている。
- (3) 滝村・小松前掲著58頁 参照。
- (4) 滝村・小松前掲著63～76頁。
- (5) ひかりのさとの会『ひかりのさとひかりのさとの会20周年記念誌』、1994年5月、51頁。
- (6) ひかりのさとの会機関誌「ひかりのさと」第1号、1974年8月、1頁。
- (7) ひかりのさとの会前掲機関誌1頁。
- (8) ひかりのさとの会前掲機関誌2頁。
- (9) ひかりのさとの会前掲機関誌第2号、1974年10月、5頁。
- (10) ひかりのさとの会前掲機関誌2頁。
- (11) ひかりのさとの会前掲機関誌第12号、1976年6月、4頁。

- (12) ひかりのさとの会前掲機関誌第11号、1976年4月、5頁。
- (13) ひかりのさとの会前掲機関誌第23号、1978年4月、6頁。
- (14) ひかりのさとの会前掲機関誌第64号、1984年4月、3頁。
- (15) ひかりのさとの会前掲機関誌第71号、1985年4月、3頁。
- (16) 糸賀一雄著作集刊行会『糸賀一雄著作集Ⅲ』日本放送出版協会、1983年6月、112頁。

「ひかりのさとの会」の歩み（1985年頃まで）

年	月	愛光園	ひかりのさとの会	他者との出会い・関わり・協力
1955 (昭和30)年		〈血井寿子〉 名古屋で乳児院の保母となる		
		脳性麻痺の勉強、肢体不自由児施設の見学、マッサージの勉強を始める		脳性麻痺の男児と出会い
		1ヶ月間、脳性麻痺の4歳児（布目雅裕君）を預かる マッサージ師の資格を得る 重度障害の子ども達のために、ある家庭を解放してもらい、昼間保育を始める 数名の子どもと一緒に止揚学園で、保母として勉強する		
1964 (昭和39)年	当初	名古屋に戻り、アパートの一室を借りて雅裕君を中心に脳性麻痺の子どもを預かる		
	2月	土地探しと資金集め開始ー借金の依頼行脚		東洋陶器会長の江副孫右衛門に資金の半分の援助を受ける
	4月	現在の愛光園の土地を入手する		
	9月	募金の趣意書作成し、遠方の友人、近くの見知らぬ方などに、呼びかける		豊橋の中尾建築会社が、建物の建築を無期限で格安で引き受ける
		光に満ちた暖かいこの場所に建つ家を胸に描き、愛光園と名付ける		
		八畳二間、トイレ、風呂場のプレハブ完成ー300坪の畑に17坪の建物		
1965 (昭和40)年	3月	開園協力者とともに祝賀会		バンビ君の寄付はじまる CBCテレビの婦人ニュースで愛光園の開園が取り上げられる
	4月	愛光園開園、入園者は布目雅裕君		
	5月	財団法人の認可が下りる		近所の人から植木、大工から訓練用のイス、布団屋から布団の寄付
		送迎に必要な車（コロナ中古）を入手する		車入手の世話をしてくれた久田さんー以後無料で修理をしてくれる
				<愛光園>週2回あゆみの箱のグループがボランティアで来園するようになる
夏			北川益衛・秋子夫妻の寄附始まるー以後20年間続く	

1966 (昭和41)年		日本自転車振興会へ補助金申請		(皿井の) 妹の友人の村岡京子と一緒に住みこみで援助
		竹中工務店の会長である竹中藤衛門氏に訓練室増設のための協力依頼		竹中工務店の名古屋支店が無料で設計図を作成
1967 (昭和42)年	春	日本自転車振興会補助金申請認可→厚生省が認可施設でないという理由で認可せず		
	5月	訓練室設計図再作成		高校時代の友人からの励ましの手紙や寄付金
		訓練室増設のため隣地の松林購入		5月中の来園者：中京地金大島社長婦人、地元の共和病院加藤院長婦人と中村事務長さん、大高の長田電気製作所の常務都筑氏夫人、名古屋の中央教会の田島牧師、武豊の杉石病院の牧野事務長
		あゆみの箱から通園バス寄贈—ともだち号		名古屋西陵高校生8名、地元の中部化繊工場の寮生代表4名が奉仕作業。中部化繊の寮での愛光園のため募金箱
			中日新聞に愛光園の記事が写真入で掲載	
1968 (昭和43)年	4月	訓練室の竣工式		
		建設資金のための募金活動継続するも公の補助金はなし。大口の寄付も免税対象とはならず		建設資金の為に名古屋友の会、名古屋国際婦人クラブによるバザーなどの純益金の寄付
1969 (昭和44)年	5月			数名の方が週に1度ずつお手伝いに来てくれる
	7月	広瀬の指導のもと週1回のグループディスカッション開始		大府小学校の4年生の男の子が、一ヶ月働いた新聞配達のお金を封もきらずに置いていってくれる
1970 (昭和45)年	5月	第2期工事(給食室・入浴室)完成		給食実施に当たり刈谷と名古屋の主婦が奉仕。食器は日本食器が提供
	10月			名古屋の広田さん、刈谷の神谷さん、大府の服部さんによって週2回の昼食作り奉仕
	11月			高校生からの手紙—愛光園の使命が子どもの楽園のみではなく、子どもたちにふれて下さる多くの人々に、無言で人間の生命の尊さと愛とを知らせる場所になるとしたら、この子らのもつ本当の使命が果たされていくのではないかと思います
	12月	県文化講堂において未来座の「ピノキオ」鑑賞		広田さんの骨折りで未来座が招待
1971 (昭和46)年				桃陵高校来園
	4月			浅井さん、桜の若木40本寄付
				名古屋友の会、安城協会、国際婦人協会、井上祥子らからの寄付や奉仕
	6月			サークルあすなろが砂場の砂を取り替える
				愛知マツダ横須賀出張所所長中古のボンゴ寄贈

			ジョンソン株式会社の社員15名が日曜日を返上して、一日床磨き
	7月		石田ナルが来園し協力
	8月	種無しぶどうの食べ放題に招待される 父母会一ひとりひとりの将来について話し合う	大府長根葡萄がり組合の招待 小牧のつくしの会による屋根のペンキの塗り替え
	12月		大府の青年学級の方たちの清掃奉仕 小牧のつくしの会による協力
1972 (昭和47)年	1月		餅つき大会
	4月	肢体不自由児通園施設として認可される	竹中工務店社長より1千万円の寄付 医師の外山吟子、看護婦の小田みつ協力
	5月	認可施設となったお祝いの会	大府市議員十数名の参加→対外的なことをしたのは初めて、数日後議員の一人の深谷さんがカーネーションを届けてくれる
	9月	父母会一措置費だけではまかないきれない現状を話す	<愛光園>歩行訓練、室内でのグループ遊びに中京女子大生や同朋大の学生が手伝い始める
	年末	年末に県より年末慰労金一人1万9千円	年末に大府ライオンズクラブ プレハブ勉強部屋寄付
1973 (昭和48)年	1月	厚生大臣から社会福祉法人愛光園の設立認可を得る	
	4月	施設訪問指導開始。学齢児は名古屋養護学校に学籍 子どもたちの手による自治会「つくしの会」発足	
	9月	父母会→親たちが愛光園のような施設を地域につくり原動力となってほしい	
	12月	餅つき大会	中電大高支所協力
1974 (昭和49)年	1月		「ひかりのさと」設立趣意書 日高昇氏が東浦町の6万坪に及ぶ農場を無償で提供
	2月		第1回「ひかりのさと」設立準備会 参加者100名以上ー「基本の願い」
	3月		第2回「ひかりのさと」設立準備会 参加者40名以上、ひかりのさとの会の趣意書や、会則の原案を検討
	4月	愛光園までの坂道が舗装	第3回「ひかりのさと」設立準備会 全国心身障害児(者)を持つ兄弟姉妹の会の会員も合流して出席 大府市の有志によるチャリティボーリング大会開催、ジャコスタークラブによる純益全寄付
		県からの補助金、重度児一人あたり一ヶ月4324円となる。また1974年度から民間施設運営費がもらえるようになる	婦人之友6月号「ひかりのさとをめざして」記事掲載

5月		第4回 「ひかりのさとの会」発足 会長－勝川武、副会長－佐々木秀・皿井寿子、書記－中島甲一、会計－水野九三男、相談役－日高昇・鈴木寿男・江尻彰良	東海銀行大府支店より50本の花の木寄付
			知多西遊技場組合より感謝状と百万円の寄付
6月		第5回 「ひかりのさとの会」(例会) 参加者28名 これからのあゆみについて話し合う	
7月		第6回 「ひかりのさとの会」(例会) 参加者30名 広報、農業、施設研究委員の3実行委員会設置、マスタープランについての討議	
8月		例会 参加者20数名 マスタープランについて更に研究 (皿井、勝川、広瀬試案)	
9月	はじめてのバザー開催。純利益42万9874円	ひかりのさとアンケートを会員に対して行う	つくし会愛知支部、地域婦人会、町内会などの協力
10月	大高緑地公園にて運動会		<愛光園>名古屋保育短大生50名見学 前日準備に少林寺拳法名東支部の奉仕
		三菱重工労組による220万円の募金。このお金で「ひかりのさと」にプレハブ(ともしびの家)をつくることとなる。三菱重工の骨折りで、大和ハウスが協力	三菱重工労組による「ともしび運動」三菱重工労組は署名運動により厚生省に対する「こうした恵まれぬ障害者や、運営のしにくい施設のために力をいれてほしい」と陳情、稲尾(労組委員)氏の全国組織への働きかけ
		例会 参加者21名 農場活用の基本方針 皿井による農業に対する基本的な考え方の表明	
11月		農業委員 全国愛農会副会長兼自然農法研究部長である原田氏を訪問	
		ともしびの家地鎮祭(→12月 基礎工事完了)、 例会 参加者45名 着工の経過報告 三菱重工の男女組合員への感謝状 記念植樹	
		農業委員 追進農業大学校長西尾氏を訪問	日本花の会からしだれ桜、八重桜。紅桃等40本の苗木寄贈→24日植樹
12月	餅つき大会	例会 参加者17名	<愛光園>中電大高支所協力
	クリスマス会		安城教会日曜学校による賛美歌、友の会・安城厚生病院の看護婦・大垣木の実の会によるプレゼント、YMCAの南山ランチのサンタのおじさん
1975 (昭和50)年	2月	全国心身障害者をもつ兄弟姉妹の会(BSつくしの会)が「ひかりのさと」東京集会開催	
		ともしびの家竣工式 参加者120名	三菱重工労働組合婦人協議会の募金活動によるともしびの家が贈られる

	3月	例会 新年度予算、新年度事業計画の承認、規約改正、役員増強	
	4月	例会 正食指導講師の竹下文芳氏の講義 役員会にて「重度身障者の共同生活体による独身寮の試みをテーマとして、日本の風土に即した建築様式による女子独身寮（身障者5名、アシスタント5名）の建設（費用約5,000万円）を行うこととし、三菱財団社会福祉助成金申し込みを決定	立正佼成会による柵作りの奉仕
	5月	1周年記念野外パーティ	三菱重工ともしびグループによるお手伝い
	6月	例会 参加者 三菱重工の方約30名、つくし会員と当会員等合わせて約70名 役員会 独身寮生活共同体の運営予算、募金について検討	三菱重工青婦協ともしびの会のチャリティバザー 収益金32,935円の寄付
	7月		三菱重工労働組合の協力
	8月	短波放送「重い障害児のために」という番組で「ひかりのさと」がとりあげられる	
	9月	例会 田村一二講演「福祉と教育」	
	10月	例会 助成金対象とならず 認可施設としての療護施設建設手続きをを来年度中に完成を検討→2～3年はプレハブ・日本建築各1棟を独身寮として使用するために建設することに	プレハブ住宅は一会員のお世話で恰好な展示品を格安で入手
		大高緑地公園にて運動会	前日準備に少林寺拳法名東支部の奉仕
	11月	3日ばかりで農業専従者の住屋となる日本家屋を伊那から移築	
1976 (昭和51)年	1月	小規模身体障害者独身寮（プレハブ住宅）地鎮祭	金城学院中、高浜高校、刈谷北高校での自発的バザー純益金寄付、大府市課長からの積立金寄付
	2月	小規模身体障害者独身寮（プレハブ住宅）棟上げ	
	4月	療護施設建設をめざし、独身寮建設中、農場も借りて農業生産をはかる。前田さん、山田さん、沢田さんが専従で働く。設計士とともに他施設（長野の「太陽の園」）の見学も行く。	設計担当の竹中工務店の岩崎課長、及び伊東氏「私たちが願っているところの療護施設のあり方に共鳴して下さり、積極的に施設見学をしてよりよい療護施設を共に創り出そうと考えてくださいます。」見積もり概算3億円
		野外パーティ準備、役員会	日高氏の父親である日高啓夫（元県会議員）が名誉会長となる。日高邸で仲谷県知事、東浦町長など地元の有力者にひかりのさとのことを紹介し皆も協力して欲しいとあいさつしてくれる

	6月	皿井 東浦地区のロータリークラブに招待される(日高氏を通して)ひかりのさとについて説明する機会を得る 例会 伊東設計士による療護施設の説明	竹中工務店の伊東設計士が土地の模型をもってくる	
	7月	竹中工務店の岩崎氏、伊東氏と広瀬、皿井渋谷のアビリティ社にて打ち合わせと施設見学 プレハブまどか完成		
	8月	アビリティ社の伊東氏の案内で札幌市にある社福法人ハピニス、岩見緑成園の療護施設を見学		
	9月	例会 白壁の家鹿塩完成祝賀会、農業専従の前田公平が住人 資金計画発表 療護施設建設のための資金作りのために日本自転車振興会の補助金を申請することとなる	会員である坂野さんが足の不自由な娘とひかりのさとで暮らしたいと申し出る→「まどか」の住人に	
	10月	大高緑地公園にて運動会	前日準備に少林寺拳法名東支部の奉仕 例会 県の民生部長、障害援護課の課長が視察→県の補助金が初の民間の療護施設であるため前例がない 共同募金の理事が自転車振興会に推薦するため視察 全日本自動車産業労働組合総連合会より電動車いす4台寄贈	
	12月	例会 参加者23名 皿井、坂野母娘まどかにて共同生活開始		
	1977 (昭和52)年	1月	療護施設建設に向けて、昭和52年度分補助申請 村上英治先生講演「外なる障害児から内なる障害児へー重度心身障害児とのかかわりの意味するもの」 例会 役員会 療護施設の名称決まる ひかりのさと『のぞみの家』 まどかにて『バザー実行委員会』開催	
		3月	例会一青年グループに深谷道代、鶴見とし子がかかる。役員会一募金活動プロジェクトについて目標金額5000万円 青年グループと愛光園のDグループとの交流会	
		4月	自転車振興会補助金 1億3747万円、愛知県補助金 3500万円決定 療護施設建設決定	
		5月	共長公民館で愛光園バザー 純益金86万円はひかりのさとのぞみの家の建設資金に	共長公民館館長、大府市社会福祉協議会、大府市ボランティアグループ「しずくの会」の協力

6月		田植え一以後毎年実施	カリタスジャパンよりの寄付金で農機具と車を購入
7月		日本自転車振興会から交付決定通知届く 例会一宮下俊彦先生講演会「福祉と教育」 出席者73名。役員会 「ひかりのさと・のぞみの家」竹中工務店と正式に契約	
8月		夏祭り。参加者一大人70名、子供20名、計90名。 収入一75000円。支出一59269円。残金一15731円 は施設建設資金へ 例会。特別寄付金金額一6101932円 県の審査会によって農業振興地区除外を認定される 「ひかりのさと・のぞみの家」地鎮祭	
10月		例会 バザー準備と「のぞみの家」の入所生及び働き人募集について。役員会	
11月		役員会一療護施設の枠外の重度知的障害者の為の仕事場（作業所）作りの提唱	
12月		例会一作業所を目指しての提案（実行委員を募ることに）。働き人の保育の問題。役員会一作業所作りの組織作りについて	
1978 (昭和53)年	1月	例会、役員会一1. のぞみの家の寮長の問題 2. これからの展望 イ、農業（農業専従者がいなくなる） ロ、療護施設 ハ、事務局のあり方 ニ、授産所の問題・職員住宅の問題 3、会計報告	
	2月	例会一授産所の問題「親亡き後の問題を考えねばならないので収容授産にしたい。これは定員が50名。県に働きかけて必要を認めてもらう方向にもっていきたい。当分はのぞみの家を活用して授産を考えていきたい。」この件について実行委員をつくることに 役員会一のぞみの家、寮長皿井寿子氏となる	
	3月	はじめての卒園式。19歳以上の子9名が5月開所の「ひかりのさと・のぞみの家」に入所することとなる 役員会 - 例会、役員会のあり方の検討	

	4月	愛光園園長一広瀬	ひかりのさとのぞみのいえ建設資金寄付2,249万円 「ひかりのさと・のぞみの家」完成。施設長一皿井 総会－ボランティア・行事委員発足、役員会	
	5月		「まどか」でのぞみの家や愛光園で働くお母さんのための小さな託児所開始	
		第5回バザー		大府社協、共長公民館、しずくの会の協力
	6月			中日東日本空調サービス会社杉浦社長から訓練室に大型クーラー寄贈
	7月		例会－新島淳良先生講演会「共同生活体と個人－幸福なる共同体となるために－」参加者70余名、役員会	日本生命刈谷支店より26万円募金
	8月	養護学校義務制実施	例会－緊急一時保護入所の受け入れを県と契約、職員宿舎建設において自転車振興会に補助金申請	
		夏休み		少林寺拳法名東区支部による訓練室ワックスがけ
	9月		役員会、バザー委員会－職員宿舎、2階建て5500万円の予定	
	10月		例会－稲刈り→以後毎年実施 総勢80名の協力、役員会	立正佼成会24～5名の応援
		運動会		少林寺拳法名東区支部が前日準備
	11月			立正佼成会知多教会知多支部青年部による「奉仕の集い」によりのぞみの家の清掃 参加者150名
		12月		例会－収穫感謝祭 皿井のぞみの家と地域社会の交流を広げていきたい 日本短波放送「重い障害児のために」で取り上げられる
1979 (昭和54)年	2月		授産グループ 3～4名の集まり(1年前)から平均20名を超す集まりとなる 2グループに分かれてプログラム編成 例会－宮脇修先生講演会「教育のあり方」 役員会－授産グループ 自由に動ける場所の確保→「愛光園」を利用することに	(のぞみの家) 食事係として近所の主婦の方が来てくれることとなる。
	3月	大府養護学校に肢体不自由児学級の増設が認められる	役員会－のぞみの家の入所者・職員の増加により、職員宿舎の建設が緊急を要する事態になっている。会と地域及びその他の団体との交流の必要性が強調される。→夏祭りを交流の場に	

4月	教室建築工事開始	託児所「まどか」から「鹿塩」へ	
	学齢児—毎日通園、幼児—火木土通園、水曜1時帰りとなる		
5月	第6回バザー 純益金寄付金を含めて61万円余は教室建設資金にする		
6月		例会—田植え	立正佼成会5、60名の参加
7月		例会 柚木崎次郎「福祉とは何か—人間らしいせいかつとは—」、耕地問題—1反のみ美浜に借りることに	
		役員会 託児所の保母さんの身分について	
9月	新教室落成式		
	合同職員会 のぞみの家が単なる認可施設としてあるのではなく、ひかりのさとの理念を实践する大切な場でもあるわけで、その事を皆で確認しつつ、皆の思いを話し合う		
		葡萄狩り	東浦町森岡の深谷正蔵氏の招待
10月	運動会		日産自動車労連万国旗寄贈。少林寺拳法名東支部による前日準備
11月			立正佼成会青年部によるのぞみの家清掃作業
12月			蒲郡の坂本さん他7名によるアイスクリーム作り実演等のボランティア
			東知多ロータリークラブによる餅つき
			愛知自動車労連支部のカンパによる車椅子寄贈
			<愛光園>自動車労連招待による劇団四季「青い鳥」観劇
	クリスマス会		少林寺拳法名東区支部が前日準備。愛知地区教会婦人会連合会、名古屋友の会、大府遊戯場組合、浅田木材によるクリスマスプレゼント。共和町ハッ屋地区少年野球団による募金箱
1980 (昭和55)年	2月	例会 講演会 日本アビリティーズ協会事務局長伊東弘泰氏「地域福祉活動」“世界と日本”	
	3月	卒園式 卒園生19名うち18名が大府養護学校(4月より肢体不自由児学級開設)へ	
	5月	創立記念立食パーティー以後毎年実施	
	7月		例会 講演会 竹熊宣孝氏「いのちと土を守る」
ひかりのさとの実践がNHK教育テレビ福祉の時代で放映			

	8月		ワークキャンプ以後毎年実施	
	9月		例会 職員宿舎 6500万円の国庫補助が決定	
	10月	ひかりのさとの保育園児との混合保育開始	<ひかりのさと>職員宿舎地鎮祭	
	11月			(ひかりのさと) 立正佼成会との交流会
	12月		例会にて授産ホームについて親たちが話し合う	自動車労連招待による劇団四季「王子と乞児」観劇
		クリスマス会		竹中工務店によるケーキ
1981 (昭和56)年	2月		例会 講演会 小林美喜子氏「食と健康をもとめて」 職員宿舎資金計画 国庫補助金 60423000円、借入金 47,300,000円、自己資金 46,379,000円 計 154,657,000円 3月25日完成予定	
	3月		例会一出席者の顔触れが固定化して、なかなか一般会員が出席しない問題 役員会一のぞみで使っている食品を、会員や地域の人々にも流通していくための窓口として共同購入委員会設置について	
	4月		職員宿舎竣工式 まどか(女性宿舎)一授産ホーム、鹿塩一保育室、ともしびの家一集会室や作業所等として活用することに <まどか>重度の知的障害者のための未認可施設「生活ホームまどか」が7名の住人と3名の職員で開所 総会一共同購入委員会設置	
1982 (昭和57)年	1月		授産グループ話し合い 「親の肉体の限界が来ないうちに生活ホームがほしい」	
	2月		例会 講演会 田村一二氏「ぜんざいには塩がいる」 役員会一ひかりのさとのあり方が話題となる	
	4月		授産グループ「生活ホーム」がスタート	
	6月		例会一田植え	立正佼成会、一休さん、常滑ボランティア、大乘教育年部
	7月		例会一講演会 宮嶋真一郎氏「真実を求めて一共働学舎の体験を通して一」 授産委員会一第3日曜の集まりについて。従来の仕事から廃品回収にしぼる。年内に授産施設の青写真を完成させたい 第4回ひかりのさとワークキャンプ一授産グループの廃品回収を共同作業としてやる	
	8月			立正佼成会、一休さん、五十三会

	10月	稲刈り・60名	立正佼成会、一休さん、常滑ボランティア、大乘教青年部
		運動会	少林寺拳法名東区支部が前日準備
	11月	ひかりのさとバザー 売上合計2,227,472円 寄付金620,087円	立正佼成会、知多農協青年部。名古屋友の会、五十三会
		ボランティア委員会-ボランティア連絡会 参加者14名	<愛光園>自動車労連招待による劇団四季「むかしむかし象がきた」観劇
		ボランティア委員会 社協と協力して第2回「施設・在宅福祉ボランティア講座」開催 参加者15名	
1983 (昭和58)年	1月	例会-新年会 授産施設昭和60年度開設をめざす	
	3月	授産グループ-廃品回収 参加者89名 収益72,000円	
		役員会-58年度の基本方針について	
	9月	<まどか>まどかの建設にむけて昭和59年度の日本自転車振興会の補助金申請	
	10月	運動会	少林寺拳法名東区支部による準備
	12月	例会 野上芳彦氏講演会「ボランティアとは人間であることの証」	
クリスマス会 ひかりのさと保育所と合同		日本キリスト教団愛知婦人会、友の会、東海警察署、大府遊技場組合、山本皮工芸教室によるクリスマスプレゼント	
1984 (昭和59)年	1月	例会 新年会 農業-4月末までに授産の人の働く場所として鶏小屋を3棟建てたい。500羽飼育の予定。ボランティア-地域グループ作りのアンケート調査をしたい 役員会	
	2月	<まどか>自転車振興会からの更生施設建設の補助金内定 8699万円 寄付金目標額5000万円	
	3月	例会 授産-廃品回収58,000円の収益、生活ホーム閉鎖 59年度は通所、施設建設のため保育所・ホームとも移動	
	4月	日本自転車振興会補助金決定	
	7月	<まどか>更生施設「まどか」入札 2億1900万円で竹中工務店落札	
ひかりのさと創立10周年記念チャリティーバイオリンコンサート開催			

	8月	<まどか>建設始まる ひかりのさとの会積立金 1,480万円	
	10月	例会 稲刈り まどかの建設資金2000万円不足、 会計 会費2,484,863円 寄付 3480651円、会員の 伊藤さんの提案（大府養護学校卒業後の問題）	
	12月	例会 講演会「玄米食のすすめ」沼田 勇先生、 まどかの寄付金3000万円のめどができる	
1985 (昭和60)年	2月	例会 大府養護学校へ付き添い通学している母子 11組の話、卒業後の問題、ひかりのさとに関わっ ていきたいとの訴え	トヨタ車体軽音楽部サウンズクリエイションによる 演奏会
	3月	例会 まどか建設の経過報告 3月10日完成 37 名の入所者内定、職員は山田優施設長に、のぞみ から10名いくことに。大府養護学校卒業のひとた ち→4月から愛光園に週2回集まることに	
	4月	精神薄弱者更生施設「まどか」の竣工式・開所式 定員40名	豊田寿子の尽力により、豊田自動車をはじめ、中 部財界より多額のご寄付
		<ひかりのさと>ユニー・ラブラ出店検討委員会 発足 ともしびグループ発足 愛光園の一室にて活動。 学習を行う	
	6月	例会 共同購入委員会常設コーナー設置、通所療 育施設をめざす大府、半田養護学校卒業の人のグ ループはともしびグループと名づけられる	
	7月	ともしびグループ 月1回のぞみの家にてプロ グラムに参加	<ひかりのさと>第1回 ユニー・ラブラ出店
	9月	例会 ともしびグループ バザーに向けて長袖の トレーナーに刺繍、職員宿舍建設経過報告 2400 万円の予算で1階を保育所、2階に男子独身寮3 室を社福法人愛光園の事業で着工。役員会	
	12月	例会 講演会「生きることはわかちあうこと」岩 村 昇先生	
		クリスマス会	